



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 10 月 3 日(金)

発行 館長 加藤 智 一

ヒガンバナの毒性



今日も元気にチャリ通勤。それにしても霞城公園にはいろんな植物が自生してますな。今日の話題は、すっかり終わりにかけてはいるものの、あいかわらずの存在感で私たちを魅了する赤い一本花、ヒガンバナ（彼岸花）です。霞城公園お堀沿いの土手で見ることができます。

秋のお彼岸の頃、田畑のあぜ道や墓地の周辺に真紅の花を咲かせるヒガンバナは、日本人にとって馴染み深い存在です。燃えるような赤い花弁が放射状に広がるその姿は、どこか妖艶でありながらも、哀愁を帯びた風情を漂わせています。ですがこの美しい花には、意外な一面もあります。ヒガンバナは、強い毒性を持つ植物なのです。毒の正体はリコリンとアルカロイド。ヒガンバナの毒性は、主に球根（鱗茎）に含まれるアルカロイド類によるものです。中でも「リコリン (lycorine)」という成分は、最も代表的な毒素であり、摂取すると嘔吐、下痢、腹痛、呼吸困難などの中毒症状を引き起こします。リコリンは神経系に作用し、重篤な場合には麻痺や死に至ることもあります。致死量はおおよそ 10g とされており、特に小児やペットにとっては危険な存在。しかしこの

毒性は、ヒガンバナが自然界で生き延びるための防御機構でもあるのです。動物に食べられないようにするため、強い毒を蓄えていると言わ

れています。実際、ヒガンバナの球根を誤って食べた家畜が死亡したという報告もあるそうです。そこで人間は、この毒性を利用することを思い付きました。ヒガンバナをあぜ道や墓地など人の生活圏に植えます。すると、モグラやネズミなどの害獣を遠ざける効果がありました。田畑の作物を守るためにあぜ道に植えられてきたのです。また墓地に植えることで、遺体を掘り返す動物を防ぐという目的もあったと言われています。つまり、ヒガンバナは「毒をもって守る植物」として、人々の暮らしに密接に関わってきたのです。

ヒガンバナには「悲しき思い出」「あきらめ」「再会」「死」など、どこか物悲しい花言葉が多く付けられています。これは、墓地に植えられていることや、毒性を持つこと、そしてその燃えるような赤い色が血を連想させることなどが影響していると思われます。（※ヒガンバナは曼珠沙華とも言います）

また、ヒガンバナは「葉と花が同時に存在しない」ことでも知られています。花が咲く頃には葉はなく、葉が茂る頃には花は枯れています。この特性が「決して交わらない」「すれ違いの象徴」として、文学や詩歌の中で悲恋や別離の象徴として描かれることも多いようです。北原白秋の『曼珠沙華』は、詩集『思ひ出』に収録された詩で、山田耕筰が作曲した歌曲としても知られています。歌詞には「赤い御墓の曼珠沙華」「血のように咲く七本の花」など、死や別離を象徴する描写があり、亡くなった子どもを悼む母親の歌とも、墮胎した女性の悲しみとも、初恋の記憶とも解釈されています。

『ごんちゃん ごんちゃん 何処へゆく
赤い御墓の 曼珠沙華 曼珠沙華

今日も手折りに来たわいな

ごんちゃん ごんちゃん 何本か

地には七本 血のように 血のように

ちょうどあの児の 年の数

ごんちゃん ごんちゃん 気をつけな

ひとつ摘んでも 日は真昼 日は真昼

ひとつあとから またひらく

ごんちゃん ごんちゃん 何故（なし）泣くろ

何時まで取っても 曼珠沙華 曼珠沙華

恐（こわ）や 赤しや まだ七つ』

※「ごんちゃん」とは、北原白秋の故郷・福岡県柳河（現：柳川市）における方言で、「良家のお嬢さん」を意味しています。

